

新作能上演「高虎」

第一部 能楽解説

・講演「世界の中の能と狂言」 真鍋 晶子
 ・能舞台の解説

・囃子の解説

第二部 能

・ナレーション「高虎」 中島みちる



ツレ・高虎の母 深野 貴彦

前シテ・高虎の父 浦部 好弘

後シテ・高虎 浦部 幸裕

高虎

ワキシテ・從僧 有松 遠一
 ワキ・天海僧正 小林 努
 ワキシテ・從僧 岡 充

大鼓 谷口 正壽 大鼓 井上 敬介
 小鼓 林 大和 笛 森田 保美

間狂言 茶屋の主 茂山 茂

旅の者 茂山 宗彦

茶屋の妻 井口 竜也 後見

橋本 光史
 分林 道治

吉田 篤史 吉浪 壽晃
 寺澤 幸祐 井上 裕久
 浅井 通昭 古橋 正邦

終了予定 十六時頃

藤堂高虎とは



藤堂高虎（一五五六年〜一六三〇年）は、近江国藤堂村（現滋賀県甲良町大字在士）に生まれた戦国武将・大名。身長六尺二寸（一九〇センチ）の大男で身体に戦傷の無いところがないほどの猛将であったと伝えられる。

一時の実力者七人に重用されるなどした後に伊賀伊勢三十二万石の大名となり、徳川家康には臨終の席に同席を許されるなど重用される。築城の名手でもあり、宇和島城、今治城、篠山城、津城、伊賀上野城、膳所城、二条城、さらには上野東照宮、東叡山寛永寺、日光東照宮、二条城、南禅寺三門など現代にも残る様々な建築の「縄張り（曲輪や堀、門、虎口等の配置）」などを手掛けた。また、高虎と伊達政宗が能楽主催の双壁であったとの記録もあり、能楽「喜多流」を恩顧し、能楽を愛した文化人でもあった。

あらすじ

徳川家康の側近であった天海僧正は、ある宿願によって都へと旅立ち、近江国甲良の里で満開の藤の花に立ち寄ります。老人夫婦が現れ、在士八幡宮や藤の縁起を語ります。藤堂高虎のことも詳しく語る二人は、実は高虎の両親の霊でした。

〈中入り〉

天海僧正一行が藤の木陰に旅寝すると、高虎の霊が現れ、盟友天海との再会を懐かしみます。天海僧正の上洛は、生前高虎と約束した南禅寺山門供養のためだったのです。家康臨終の折に主君家康と同じ宗派へ改宗したことや、家臣に情をかける高虎の人柄が語られ、ときは大阪夏の陣、合戦で家臣を多く失った無念の苦しみを訴えます。やがて修羅の霧が晴れると、高虎の治めた領地の数々の景色が見え、天下泰平を祈りつつ、紫雲が現れて遠く姿を消すのでした。

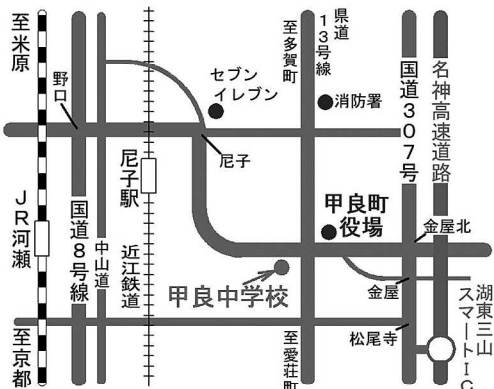
間狂言（中入り）

【餅のおかげで大名になれた。藤堂高虎の旗印・白もち三つの由来】

高虎は、仕官先を求め三河までやってきた時、遂に手持ちの資金を使い果たしてしまいます。空腹で歩いていた時、三河国吉田宿（現・愛知県豊橋市）の餅屋で焼いていた餅に飛びつき、夢中で餅を食べ始めました。しかしこの餅屋の主人・与左衛門は少し変わった人物で、餅代を請求しないどころか、高虎に旅費まで恵んでくれました。それから三十年後。大名となった高虎が行列を従え吉田宿に差し掛かり、あの餅屋を訪れます。

ちなみに高虎の旗は、丸が三つ描いてありますが、これは「三つ餅」といって、『白い餅』（城持ち）といった願望が込められていたといわれています。もちろん、関ヶ原合戦で高虎は、この三つ餅の旗で参陣しています。浪人の高虎に出世のキッカケを与えた餅です。

会場へのアクセス



甲良町立甲良中学校・体育館

滋賀県犬上郡甲良町在士392

TEL:0749-38-3200

【交通アクセス】

◆車の場合…湖東三山スマートICより13分

◆電車の場合…JR河瀬駅よりバスで15分